

情報リテラシー推進に向けた、大学図書館での利用指導の一考察 ～2002年度関西四大学図書館職員研修会参加報告～

森井 禄子

はじめに

標記研修会は、大学図書館業務についての情報交換および調査研究を行い、関西四大学図書館の発展に寄与することを目的として行われるもので、2002年度は平成14年12月13日(金)に、立命館大学衣笠キャンパスにおいて開催された。本学からは4名、関西学院大学からは5名、同志社大学は4名、当番校である立命館大学からは7名の、全20名が参加した。

今回の研修のテーマは、「図書館における『エクステンション・サービス』をさぐる～情報リテラシーと“攻め”の図書館サービス～」と定められ、各大学とも、新たに取り組んでいる図書館サービス(主に利用指導)を中心に発表された。本学においては、平成14年度の関西大学学部教育リフレッシュ予算によって実験的に行った図書館利用指導について、その実施報告を中心に発表した。なお、本学のこの企画は、図書館全体のプロジェクトとして「リフレッシュ企画推進チーム」を編成して取り組んだもので、今回はそのプロジェクトチームとして参加した。

実際には図書館業務に関わるいろいろなことを話し合ったが、この報告では、議論の中核になった図書館利用指導のうち、特に私が印象に残ったものを中心にまとめることにする。その方法としては、「授業との連携」と「大学院学生」の2点に着目し、本学の企画をベースにして、それと比較するような形で他大学の取り組みを検証したい。そのうえで、情報リテラシー促進に向けて、本学の利用指導をどのように展開していくかを考えていきたい。

テーマ：授業との連携

パターン1：関西大学の場合

このテーマにおいて、まず注目して欲しいのが、本学の取り組みである。前述のとおり、私たちはチームを組んで、通称「リフレッシュ企画」という実験的図書館利用指導を行った。私たちはこの企画を立案・実施するにあたり、「課題解決に直結する、より実践的で効果的なガイダンスを行う」ことを主

目的として取り組んだ。そして、それを実現する方策として、従来からの検討課題であった「体験実習型ガイダンス」に挑戦することにした。

(1) 授業との連携に着目した理由

今回、私たちが「授業」を強く意識したわけは、利用者、特に学生の、課題解決におけるモチベーション強化を支援したいためである。現在実施しているガイダンスの中にも、クラス単位で文献情報の探し方の習得を目標としているものがあり、ゼミやクラスのテーマ・内容に関係したデータベース等ができる限り取り上げることで、学生の情報リテラシーの向上を目指しているが、ここで利用するデータベースの多くは、図書館が利用に供している代表的なものを図書館員が独自に選んだものであるため、教員や学生が本当に必要としているものと合致しているとは言い切れない。学生に「調べてみよう」という気持ちを起こさせ、学生のモチベーションを強化し、課題解決に向けてステップアップさせるためには、“使える”データベースであるということ、学生たちに認知・理解させる必要がある。そして、そのためには、何よりも、授業に「密着」したものでなければならない。授業に根ざしたガイダンスこそ、学生の学習意欲を支え、課題解決におけるモチベーションを強化させることにつながる、と私たちはそのように結論付けた。そこで、今回、私たちは、教員と綿密に協力しあうことで、より密度の濃い、モチベーション強化に効果的なガイダンスを企画するに至ったわけである。

(2) “課題解決”ガイダンス

学生のモチベーション強化には、教員との連携による授業に密着したガイダンスがその一翼を担うと私たちは考えたわけだが、ただそれだけでは、学生のニーズを十分に捉えることはできない。近年の急激な情報化において、情報リテラシーの習得は必須の事項となり、私たちの図書館においても、情報リテラシー教育が図書館利用指導の頂点の一角をなしていることは周知の事実である。そして、ガイダンスにおいても、より実践的で効果的なものが要求さ

れるようになった。

しかし、現在実施しているクラス単位のガイダンスは、いわゆる「講義形式」であり、これが最大の弱点となっている。学生にとっては、ただ聞いているだけになってしまうこのガイダンスでは、十分に理解したと「実感」させることは難しい。この方法では、情報リテラシー教育の向上を促すのには限界がある。

学生のモチベーションを強化する“課題解決”ガイダンスを実現するには、授業に密着した内容であると共に、より実践的な実習形式のガイダンスでなければならない。この「授業」と「実習」が結びついてこそ、私たちが目指そうとしている、学生の自発的な課題解決を促す新しい図書館利用指導が実現すると考え、この2つの要素を兼ね備えた「体験実習型ガイダンス」を実験的に実施することにした。

(3) 体験実習型ガイダンス

私たちが今回のガイダンスに求めたことは、今述べてきたとおりである。では、この「体験実習型ガイダンス」の効果と課題についても少し触れたいと思う。

今回の実施においてネックとなったことは、「1人1台のパソコンを使用する」とこと、「授業に密着した内容の濃いものにする」ということだった。

体験実習型ガイダンスというからには、1人1台のパソコンを確保しなければならないわけであるが、残念なことに、図書館内にはガイダンスに使えるパソコン教室がない。そこで、本学の情報処理センターの協力を得て、サテライトステーションをガイダンス会場として使用することで実施にこぎつけることができた。また、このことは、初めて図書館外の会場で行ったということで、図書館内のガイダンスだけに縛られないという貴重な経験を得ることもとなり、利用指導のサービスの幅を広げるよい布石となったと思う。

また、より授業に密着した内容の濃いものにするためには、使用するデータベースの選択を吟味するだけでなく、授業の内容に詳しい人の協力を得ることも必要である。そこで、今回、私たちは、専門分野の知識を持った大学院学生をガイダンス補助員(TA)として採用することにした。ガイダンス補助員に大学院学生を起用するというのも、私たちににとっては新たな挑戦だった。TAとして採用することで、ガイダンスの専門性をより強化できただけでなく、図書館員だけではなかなかわからない、授

業に関係した貴重な情報を数多く得ることができ、個人的にも満足のいくものになったと思う。TAをガイダンスに登用できたということは、今後の利用指導のあり方に一石を投じる結果になったと思われる。

次に効果であるが、端的に言えば、予想を上回る反響があったと言える。これについては、今回の実施の際に取ったアンケートが如実に物語っている。なかでも特に、体験実習型ガイダンスに対する学生の感想については、当初の予想を越えるほぼ全ての学生が支持してくれた。この点から考えても、今回のガイダンスは一定の成果があったのではないかと判断している(なお、このアンケートの詳しい集計結果については、リフレッシュ企画推進チームからの報告「大学図書館における新たな情報リテラシー教育を求めて～学部教育リフレッシュ企画の実践～」を参照されたい)。

しかし、万事がうまく運んだわけではなかった。懸念していたサーバーのダウンやレスポンス速度の問題、アクセス制限を解除する上で起こったシステムエラーなどが、ガイダンスの進行を妨げた。そして、この手のトラブルにいかに対処していくかが毎回の課題であった。それでも、今回のアンケートの結果のように、学生の強い支持が得られたということは、今後の実施に向けての励みになることである。

以上述べてきたように、本学が目指してきた「授業との連携」とは、「授業に密着したガイダンスを行うことで、学生の主体的な課題解決におけるモチベーション強化を支援する」ことを意味しているのであるが、この本学の取り組みは、一般的に分類されているパターンとは若干異なっていると思われる。

「授業との連携」については、各大学図書館でも率先して実施されているものであるが、これらについては、立命館大学の配布資料「ガイダンスのさらなる高度化に向けて～学習・研究との接点の模索～」¹⁾によると、大きく「科目新設型」と「既存科目併合型」の2パターンに分けることができる。

「科目新設型」は、図書館利用指導を正規のカリキュラムとして実施するものである。現在このタイプで実施している大学では、半年開講が基本となっているようだ。他の科目と同様に定員に制限があるが、講義だけでなく検索実習なども組み合わせる実施できる利点がある。だが、最も大きな利点は、やはり単位が認定できるということであろう。単位と

いう、学生の学習意欲を支える大きな目標が設定されているため、学生のモチベーションを維持することができる。

次に「既存科目併合型」は、既存の授業科目の一部分を、図書館利用指導に当てて実施するものである。現在、授業の1コマ～数コマで実施しているところが多く、実施回数は少ないが、その授業を受講している学生が対象となるので、受講者を拡大することができる利点がある。ただし、実施回数が少ないので、検索実習の実施は難しいようだ。

以上に述べた2つのパターンが、全国的に実施されているタイプであるようだが、この2つの共通点は、いずれも「カリキュラム」として実施しているという点である。そしてこの点が、本学の取り組みと異なる点である。本学がこの企画で主軸を置いた「授業との連携」は、実施形式だけでなく実施内容にも重点を置いたものであり、この点を、私たちは、他大学と異なる、本学図書館ガイダンスの“ウリ”にしたいと考えている。

パターン2：他大学の場合

さて、私たちの取り組みを全国的なガイダンスパターンと比較して考えてきたが、さらにガイダンスの展開を考えていくために、他大学の状況を比較検討してみたい。ここでは、特徴的な2つのタイプを取り上げ、それぞれ具体的にみていくなかで、本学の取り組みとどのように異なるのか考えていきたい。タイプ1

まずは、既に正課ガイダンスとして実施されているものとして、関西学院大学（以下、関学）が2000年から取り組んでいるガイダンスを取り上げる。この取り組みは「OPAC検索演習」というもので、既存の必修科目と併合して実施されているものである。神戸三田キャンパス（KSC）図書メディア館において、総合政策学部の必修科目である「コンピュータ演習Ⅰ」の授業のうち、1/2コマをこのOPACの検索演習にあてている。先述の2パターンでいうと、「既存科目併合型」というタイプのものだ。

この演習の目的は、学生の「学習過程における検索技術向上」と「学術情報収集能力向上」の支援である。学生に最低限必要な検索技術と知識を習得させるのがねらいのようで、OPAC検索以外にも、資料の入手方法や新聞記事データベースなどの有益なデータベースの紹介も取り上げているようだ。

実施スタッフとしては、教員1名、学生スタッフ2～3名、図書館スタッフ1～2名で、役割分担は、講師は教員で、検索補助は学生スタッフ、図書館スタッフはオブザーバー的な存在であるということだが、私はここに関学の取り組みの魅力を感じている。つまり、担当教員主導で行う体制をとっているという点にである（教員主導を実現するために、事前に図書館員が教員に対してガイダンスを行っているようだ）。また、既存の授業の一部として実施するため、実施に伴う事前準備（スケジュールリングや教材作成など）においても、図書館員だけではなく、担当教員の協力も得ているようだ。

目的や内容については、OPAC検索演習を中心に持ってきているところが本学の下位年次向けガイダンスに相当するように思われるが、やはり必修科目として実施することで、その科目を履修しているすべての学生に対する早期情報活用教育につながれるというメリットは大きい。また、ガイダンスそのものに対しても、従来の“図書館のオリエンテーション”から“情報リテラシー教育”へ、その存在意義を昇華することができるということも、この必修科目として実施する大きなねらいのひとつであるようだ²⁾。

タイプ2

次に取り上げたいのは、来年度新たに正課授業として開設する立命館大学（以下、立命館）のガイダンスである。これは、学部1回生を対象とした正課授業「情報リテラシー」科目において、「学術情報

収集・利用法」を目的として実施するものである。講義予定としては、全30コマのうち1コマ～3コマを図書館ガイダンスにあてて、図書館利用法などの図書館の基礎知識のほか、図書や論文の収集や情報倫理についても触れるようだ。

ところで、立命館は、この提案理由として大きく4つのポイントをあげられたが、なかでも、『図書館利用教育ガイドライン（大学図書館版）』（以下、「ガイドライン」³⁾）を引き合いに出された点が、本学と共通するところである。

「ガイドライン」では、図書館利用指導の目的・目標を、5つの領域⁴⁾で明文化しているが、立命館では、このうちの「領域3：情報探索指導」については正課授業で取り上げられておらず、図書館が開催する各種ガイダンスに各自で参加する以外に、データベースの実習等を習得する機会がないとみなしている。しかし、全学生を対象として実施するに

は、図書館単独の企画では受講者数に限界があるのは明白である。そして、この「限界」が新ガイダンスを打ち立てる原動力となったようだ。

このように基本とするところは本学と共通しているのだが、「獲得目標」の設定については、「正課授業」としての有り様の違いが関与しているように思われる。

本学のように、ゼミやクラスの1コマをガイダンスにあてて行う場合は、授業(ゼミ)の責任は教員にあり、獲得目標の設定は教員によって左右されるため、必ずしも設定できるとは限らない。しかし、立命館のように図書館主体で行う場合は、全てにおいて図書館がイニシアチブを取ることができるため、獲得目標を明確に設定することができる。立命館は、この獲得目標として、「必要とする情報に効率的・効果的にアクセスを行うための基礎知識・方法の体系的な習得」と「学生各自が主体的に情報収集を行う意識改革」をあげ、これを達成することによって、広義の情報活用能力の習得を実現することをねらいとしているようだ。

立命館の実施目的やコンセプトは、図書館主体か否かという点で達成度の基準は異なるが、その方向性は本学と大差ないと思われる。しかし、その実施体制については、対照的な理論が見受けられる。それは、次の2点である。

まず1点めは、「実習」についてである。立命館では、データベースは取り上げても検索実習は行わず、講義終了後に配布する課題で復習させるという方法を予定している。これについては、同時アクセスオーバーなどのシステムの問題とコマ数が限られているというカリキュラムの問題が直接的な理由であるようだが、立命館の指導理念も関係しているように思う。

私たちは、学生のモチベーション強化を効率的に図るために「実習」を重視しているのに対し、立命館の場合は、重視すべきは「情報アクセス方法の基礎知識・方法の伝授」であり「情報収集における学生の意識改革」であるとし、実習については特にこだわる必要はないとみなしているようだ。つまり、本学では実習は「手段」であり、「目的」でもあるのに対し、立命館では「手段」として捉えており、この認識の違いが、両者の実施体制に関与していると思われる。

2点めは、講師体制についてである。講師については、図書館のガイダンスとして行った本学の場合

は図書館専任職員(以下、専任職員)が、既存授業の一部として行った関学の場合は担当教員がというように、それぞれの責任者に相当するものが担当しているように思うのだが、立命館の場合は、正課授業として行うが、専任職員が指揮をとるのは企画・運営・管理で、実際に実施を行うのは、担当教員でも専任でもなく委託職員であるらしい。

これは、ガイダンスのテキストを標準化することによって、委託職員でも講師ができるように工夫したことで実現したわけである。また、この講師体制の変更は、ガイダンスの常時開催を可能とするためのもので、多様なガイダンスの展開を図ることを目的としているようだ。

このように、実施コンセプトは共通するものがあったとしても、実施方針や実施方法等については、各大学によって、その特徴的な要素が見られるものだ。そして、この“要素”を、本学の企画を展開する際に、うまく活用していくことが必要だと思う。

テーマ：大学院学生

「授業との連携」を切り口にして、ガイダンスの取り組みについて述べてきたわけであるが、ここでもうひとつ着目したいものがある。それは、利用者と図書館を結びつける「スタッフ」の存在である。今回私たちは、このスタッフとして大学院学生に注目した。大学院学生をTA(ティーチングアシスタント)として登用することで、より教育指導的側面を強固にした利用指導が実現できると考えた。そこで、次に、スタッフとしての「大学院学生」をテーマにして、これに関する本学と他大学の取り組みを比較検討していきたい。

パターン1：関西大学の場合

(1) フロアアシスタントの設置

私たちは今回の企画で、TAを2つの場面で採用した。ひとつは、先述の「体験実習型ガイダンス」におけるガイダンス補助員としてで、もうひとつが、これから述べる「フロアアシスタント」としてである。

今回の企画で、体験実習型ガイダンスの実施と並行してフロアアシスタントの設置に取り組んだ目的は、体験実習型ガイダンスの効果を学生の図書館利用にうまく結びつけるためであった。既に何度も触れているように、私たちは今回の企画で「課題解

決」に着目し、それに対する学生のモチベーションをいかにして強化するか、を模索してきたわけであるが、そのモチベーション強化における支援は、ガイダンスだけでは不十分である。なぜなら、ガイダンスでは図書館利用に関するこまごまとした学生の悩みに対処できないからだ。学生がガイダンスで得た知識や技術を課題解決に十分に活用できるようにならないと、私たちの今回の企画は目的を達成できたとはいえない。そこで、このガイダンスでは補えない部分をフロアアシスタントという選択肢で補充することにしたわけである。

(2) TAの活用

私たちはフロアアシスタントに対して、学生と直接に接し、学生の生の声に耳を傾け、学習における図書館の効果的な利用を指導することを主要業務とし、これをTAに担当させることにした。TAを登用した理由は、TAには次の2つの顔を持たせることができるかと判断したからである。

準図書館員としての顔

TAは教員の代理として学生を指導する立場になることもあるため、これを応用して、準図書館員という立場を与えて学生と接することができる。

先輩としての顔

大学院学生にとって学生は後輩にあたるものである。彼らの先輩として、後輩の利用相談に応じてもらう。

この「準図書館員」と「先輩」という2つの顔をあわせ持たせることで、より学生に近いところで利用指導が展開しようと試みたわけである。

(3) 利用相談の展開

今回のフロアアシスタント設置を実施するにあたり、私たちはガイドラインを整え、それを基準にした利用指導を展開した。学生の利用相談に主目標を定め、中心となる業務として、図書館のフロア（書架）案内と蔵書検索システム（KOALA）の検索指導、そして簡単な事項・参考調査（クイックレファレンス）の3つをあげた。そして、体験実習型ガイダンスで取り上げた情報検索方法や資料の入手の仕方などを、図書館で学生がスムーズに実践するための手助けを行うことを求めた。

具体的な実施期間や実施体制等については次のとおりである。

実施期間：平成14年12月9日(月)～平成15年1月16日(木)のうち20日間
 利用ニーズが高いと予想される試験前の月～土曜日に配置
 配置場所：1階メインカウンター前および2階開架カウンター前に各1名ずつ
 要 員：TA7名(曜日と時間帯で交替勤務)
 実施体制：TAを中心とした直接利用者対応型
 コンセプト：学生の利用相談に機動的に対応し、初期的な情報教育リテラシー教育を展開する

さらに、今回の取り組みでは、図書館員とTAおよびTA同士で情報の共有を図るために、利用相談記録をつけることを義務付けた。利用者の質問履歴の記録が主な目的であったが、フロアアシスタントを設置することで得られた情報を、図書館改善にフィードバックし、有効に活用できるようにしたかったためでもある。また、TAという立場から今回のフロアアシスタントについてどう考えるかというTAの意見や提言をもあわせて収集することによって、学生の自主的な課題解決能力の向上に対し、図書館として今後どのようにアプローチしていけばよいかという判断材料を得ることができると考えたことも、利用相談記録の目的のひとつである。

実際に利用相談記録をつけてみて、当初の期待以上の結果を出すことができたように思う（この結果についても、リフレッシュ企画推進チームの報告を参照のこと）。ただ、「体験実習型ガイダンス」と異なり、学生のアンケートは取れなかったため、TAの一方的な見方でしか判断できないが、それでも予想以上の種類と数の質問があったことは、設置した成果があったと判断している。

なかでも特に評価できるのは、TAの能力の高さである。前述のように、今回は主要業務を「図書館のフロア（書架）案内と蔵書検索システム（KOALA）の検索指導およびクイックレファレンス」とし、基本的な図書館利用指導を目的としたわけであるが、実際には、こちらが依頼した以上の働きを見せてくれた。具体的に述べると、MAGAZINEPLUS等のWeb版データベースの検索指導や、各種レファレンス質問に対する対応である。当初、私たちは、これらとKOALA検索を分けて捉えていたのであるが、今日、文献情報として、特に雑誌が多く取り

上げられるという状況と、雑誌を扱う場合は書誌検索だけでなく論文検索も忘れてはならない項目であることを考慮すると、論文検索などの「情報検索」とOPACなどの「所蔵検索」は互いに関連しあい、それぞれ別々に捉えるのではなくて、文献検索の一連の流れとしてグロスで説明する重要性を改めて認識させられた。また、TAはそれを指導できるだけの十分な能力を持っているということ身をもって感じる結果となった。

パターン2：他大学の場合

利用者と図書館を結ぶスタッフとして、本学では大学院学生を採用したわけであるが、他大学の状況を見てみると、大学院学生ではなく学生をスタッフとして登用しているところが多いようであった。なかでも、立命館の学生スタッフの活用は特徴的であり、ここでも本学とは対照的な理論が見受けられる。

本学のスタッフ制度と立命館のそれとの大きな違いは、学生に対するスタッフの存在意義である。本学の場合は、大学院学生を教育指導的側面をもつTAとして起用することで、学生よりも上位者のポジションで学生を指導することにした。学生が図書館を有効に利用できるようにするために、いわばフロアでの講師的な役割を担わせたわけである。反対に、立命館の学生スタッフの場合は、学生の中から選び、学生のフロントランナーとして、先頭にたたせて集団を引率させる、つまり学生同士で協力し、教えあうというものである。学生が教える立場になるため、その技能を磨くために綿密な研修プログラムを用意しているようである。

それぞれが特徴的であって、どちらがよいというものでもない。利用者に対するスタッフの立場は若干異なっているが、スタッフに求める意図は共通していると思われる。

本学での今後の展開について

本学の取り組みと他大学の取り組みとを比較検討しながら述べてきたが、最後に、今回の研修で学んだことを踏まえて、もう一度「授業との連携」と「大学院学生」の2つのテーマから、今回の本学の企画を今後どのように展開させていくかを自分なりに考えてみたい。

(1) 「体験実習型ガイダンス」 「授業との連携」

私たちが取り組んできた体験実習型ガイダンスは、突然の企画だったにもかかわらず、多くの先生方に

協力していただき、実施することができた。そして、好評のうちに終えられたことや、新しい利用指導を考えるうえでの指針になる貴重なデータを取ることができたことは、私たちにとって大変プラスになるものだった。

私たちは今回の取り組みで、体験実習型ガイダンスは効果があることを顕在化することができた。また、「授業」に着目した点も、学生のモチベーションアップに少なからず貢献できたのではないかと思う。今回の「体験実習型ガイダンス」の結果をみても、今後も継続していく価値があるものと判断することができる。

しかし、授業と連携した体験実習型ガイダンスを今後も継続していくには、私はいくつか考慮すべき点があるように思う。なかでも特に、先生方との協力体制の構築については、良案を提案していかねばならない。

今回のガイダンスのように、授業に密着した内容にする場合は、教員の授業に求める「意図」を理解し、それをうまくガイダンスに盛り込む必要がある。そのためには、ヒアリング方法に気を配らねばならない。今回は手順をマニュアル化して対応したが、より効果的なガイダンスを行うためには、ヒアリング時に先生の意見や考えを聞き出し、それに対し、どこまで取り上げられるか、どういう方法でアプローチするかを、教員と十分に話し合う必要があると思う。ヒアリングによってお互いに共通の認識ができることで、授業に効果的なガイダンスをつくることができ、それが、課題解決における学生のモチベーション強化につながるのではないと思われる。

さらに、今後は全学的に展開することも視野に入れておく必要がある。そのためには、より多くの教員に、図書館のガイダンスをよく知っていただく必要がある。つまり、教員へのアピール方法の工夫が鍵を握っているのだ。今回は全専任教員に対しガイダンスの案内状を文書で送付する方法で行い、予想よりも多くの教員に賛同していただいたが、全学的に考えてみると、まだまだ満足できる数値ではない。今後は、このアピールをどのように行っていくかも検討しないとイケないと思われる。

また、全学的な実施を目指すとなると、他大学でも実例があったような、正課科目としてのカリキュラム化もひとつの方法であるが、個人的にはカリキュラム化にはあまりこだわらない。本学では従来から「クラス単位」のガイダンスを実施しており、こ

れにおいてのノウハウを持っている。また、私たちが意図する「授業との連携」の視点で考えても、カリキュラム化して一律な内容にするよりも、「演習(ゼミ)」の一部として取り上げる方が、それぞれの専門分野に対応することができ、より効果的に課題解決に結びつけることができると思われるからである。

しかし、下位年次に対するガイダンスでは、カリキュラム化する方法で実施することが可能かもしれない。つまり、「基礎演習」の一部としてガイダンスを取りこみ、基礎的な文献収集方法を習得させるのである。これは、早期教育という面でも実施する意味があるものである。イメージ的には、関学で行われている「OPAC検索演習」のようなものを想像しているが、フロアアシスタントの実施結果からもわかるように、所蔵検索だけではなく、情報検索もグロスした内容にすればよいと思われる。

理想を中心に今後の展開を述べてきたが、ガイダンスを実施していく上で根本的な課題となる基盤整備も忘れてはならない。いわゆる、実施日時や実施期間などの時期的な課題や、事前準備における時間的な問題、ガイダンス会場の問題などである。なかでも、実施日時や実施期間、そしてガイダンスを補助するレジユメ等の準備に要する時間については、通常業務との兼ね合いを考慮する必要がある。

このように、正規のガイダンスとして継続的に実施していくには、この基盤整備が絶対必要な条件となってくる。しかし、現状ではなかなか解決が難しい問題であるため、今後はガイダンスを補充するようなコンテンツの構築など、抜本的なシステム対策などを講じる必要があるかもしれない。

(2) 「フロアアシスタント」 「大学院学生」

今回、私たちはアシスタントスタッフとして大学院学生を活用してきたわけであるが、結果的に見ても、大学院学生を起用することが成功の鍵であったと思う。なぜなら、TAとして起用することで、ガイダンスの教育指導的な側面を強化することができたように思われるからだ。また、大学院学生に対しても、教育研究的な面で支援できたのではないかと思う。1999年度の文部省(現、文部科学省)学術審議会の答申『科学技術創造立国を目指す我が国の学術研究の総合的推進について 「知的存在感のある国」を目指して』⁵⁾の中でも、TAを活用することの必要性が触れられており、図書館におけるTAとしての活用もそれを考慮したうえでの取り組みで

あるからだ。

こういったことから考えても、TAという選択は、図書館の利用指導の面のみではなく、大学院学生の教育指導の面からも効果的なものであるといえる。今後TAをより有効に活用し、利用指導を発展させていくためには、TAを継続的に受け入れる基盤作りが必要になるだろう。人件費などの財政的基盤整備はもちろんであるが、TAをより効率よく配置活用できるように、新たな利用指導システムを考案していくことが大切だと思う。

おわりに

今回、私はプロジェクトメンバーとして本学の「リフレッシュ企画」に参画したわけであるが、実際に体験実習型ガイダンスを実施してみて、“普通に”行うことの難しさを実感した。サーバーやシステムの問題もあるが、いかに段取りよく説明するかということも、制限時間内にガイダンスを行うためには必要なことである。私は計8回ガイダンスを担当したが、その多くが時間配分に偏りが生じてしまった。個人的には反省点が多いガイダンスだったわけだが、今回のガイダンスが多くの学生に支持されたことは、企画として成果があっただけでなく、個人的にも大きな励みになった。

また、フロアアシスタントでは、実施運営担当として、大学院学生を指導する役目を一任していただいた。そのほか、この関西四大学図書館職員研修会においても、初参加ではあったが、チームの代表として、パネラーという任務を任せていただいた。このように、今回の企画は、“担当としての責務を全うする”という貴重な経験を得る機会を与えてくれ、個人的に大変勉強になった。

私は今後もレファレンス担当として、利用指導の現場で学生を指導することになるが、今回の企画や研修会で得た経験を活かし、自らのスキルアップに励みたい。そして、学生の学習支援に貢献できるような図書館づくりに対し、微力ながら協力していきたいと思う。

(注) 1) ガイダンスのさらなる高度化に向けて～学習・研究との接点の模索～」研修会配布資料(立命館大学)

2) 関西学院大学神戸三田キャンパス図書メディア館の『エクステンション・サービス』～現状とこれから～」研修会配布資料(関

- 西学院大学)
- 3) 図書館利用教育ガイドライン(大学図書館版)、『図書館利用教育ガイドライン合冊版: 図書館における情報リテラシー支援サービスのために』
- 日本図書館協会図書館利用教育委員会編
東京: 日本図書館協会、2001 8
- 4) 領域1: 印象付け、領域2: サービス案内、
領域3: 情報探索法指導、領域4: 情報整
- 理法指導、領域5: 情報表現法指導
- 5) 学術審議会『科学技術創造立国を目指す我が国の学術研究の総合的推進について「知的存在感のある国」を目指して(答申)』1999 6 [参照2003 3 .12]
- (URL http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/gakujutu/toushin/990601.htm)
- (もりい よしこ 閲覧参考課)